

# 青髭 7

明宏訊

ある日、思い出したように伯爵は言った。それは彼の朝餉を早めるように用意するように下働きの者に命じて執務室に戻ってきたときのことである。

「そういえば、ジョフロアにも執務室があった、いや、今もあるはずだが、女官長に連れて行ってもらえ…」

そんな大事なことは初日に伝えられるべきではないかと、従子爵家を継承したばかりの青年は思った。いや、待てよ、それでは彼が通されて宿泊のために使っている部屋はべつに父親から譲り受けたわけではないのだ。

名前を失念していたので、それとなく質問するのもなんだから、たまたま彼女の部下と鉢合わせすることを期待した。そうすれば向こうから教えてくれるだろうからだ。べつに、貴族たるこちらからそうするような屈辱に靴を汚すこともない。そう思った瞬間に彼女が口を開いた。すこしばかり、アンリの方向を向いた。

「私の名前はアンヌにございます。アンリさま」

そこには女性にしては大柄な女官が立っていた。男性の平均身長をはるかに凌ぐだろう。きっと、嫁ぎ先には困るだろうが、伯爵の名前を出してごり押しすればなんとかならうが、アンリは、相手の男に心から同情した。

まだ見ぬアンヌの旦那に心を奪われているとは、あまりにも情けない。どうにか、対象にたいして意識を集中することに成功した。

しかし、この女には表情というものがいいのか、ご丁寧に30度ほど腰が曲げられていたが、慇懃無礼というわけではないものの、どこか、素直にその敬意を受け入れられなかった。

思わず、注文を付ける。

「そんなことを私がわからいでおもったか？」

青い血の持ち主の自尊心をせめて見せつける。この城で使われている人間はどれも変だ。体内に赤い血がめぐっている分際をわきまえていないような気がしてならない。なにか口を挟んでやりたくなかったが、それをしなかったのは、ありえないことだが、アンヌが自分の心を読んだような気がしたからだ。

それからしばらく、唇を縫われたかのように口を開くことができずにいた。彼女も無言だ。こういう時は上をつかさどる人間の気分を推量して気の利いたことでも口にしたらどうなのだと、アンリは気分が悪くなった。たまたま視界に入ったポプラの緑に向かって言いたいことを投げつけることでどうにか気分をやりくりするしかない。

回廊を二つばかり巡って、階段を上ったところにその、日当たりのよい部屋はあった。ふたたび、丁重に頭を下げて帰ろうと踵を返したところで、ようやくアンリは言の葉を発することに成功した。しかし、それは女官に対する不満の吐露ではなかった。頭をよぎったのは、父親の渋い表情だったのだ。

「ああ、アンヌ、ジョフロア、つまりは、わが父についてだが…？」

「……？」

女官長は自分が何を聞かれているのかわからないようだった。アンリには、それがどこか演技じみているようにしか見えない。ここで引き下がるべきではないと考えたところで、自分がとんでもないことを、あくまでも、結果としてだが発言していたことに気付いた。よりによって赤い血の人間に父親が手を出すなどと…さすがに口ごもってしまったアンリに、カルッカソム伯爵家の雇われ女が反撃してきたのである。

「従子爵さま、ジョフロアさまのお仕事のことは、すべてこの部屋に用意してあるとおもいますが、私のようなものには計り兼ねます」

本当にそうなのか？と思わず主張したくなかったが、たがが、赤い血の人間ごときに大人げないと思直した。部屋に入るとそこには彼の知らない父と出会えるような気がした。意を決して、ドアノブを回す。

当然のことだが室内にも太陽光が入り込んでいた。なにゆえか、アンリにとって父親は雨のイメージと重なる。彼について印象に残る映像はどれも雨音が付属している。主君への奉仕はあまりにも忙しく、武術や魔術の訓練は家庭教師が行っていたので、あえて、血族が出張る必要はなかった。

だが、この、陽光に満ちた部屋は父親の部屋として完全に申し分がない。どうして、そのような感想を持つのかよくわからないが、そう息子に思わせる何かがこの部屋にはかもし出されていた。机上は、整理整頓という四字熟語からは完全に遠い世界のこととしか思えない。羊皮紙が散乱している。しかし、それも、政務のことが忙しかったのだろうと、何かしら理由をつけずにはいられない。

「うん？…？！」

一枚、羊皮紙を除けたところ、日の目を見た二枚目の一行に見慣れた文字が並んでいた。それは彼がかつて王都で仕えていた元主人の名前が乱雑な文字で書きこまれていた。ブーリエンヌ女伯爵…。

「な?!ち、父上!？」

驚くべきことに、小さな文字で、それは写本を行っている修道士のように角ばった、じつに読みやすい文字だった。彼の元主君の名前が乱れていることとあまりにも対照的といえよう。いや、いまは、そんな悠長な分析を行っている状況ではない。王都での彼の生活が父には筒抜けだった。そのことの方がよほど重要である。

じつに情けない話だ。必死に自立しようとした結果が、結局は父親の手のひらでおどっているだけだったとは…いや、今はそんなことを気に病んでいる場合ではない。羊皮紙の上に展開している、大聖堂のステンドグラスのような図はなんだろう。真ん中には王の名前が、ピエール4世、それを中心にして、七つの有力諸侯の名前が並んでいる。それらは、ナント王位の継承にもかかわる、国内でも特別な地位を持つ貴族たちである。

もちろん、カルッカソム伯爵家の名前もある。その名前には二十囲みがされている。それは伯爵家の家老職をあずかる臣として当然の処置なのだろう。

元主人の名前の下には、彼女の妹の名前が書かれていた。

ロペスピエール侯爵夫人…驚くべき記述である。侯爵は「七つの諸侯」には属さないが次代を担う有力諸侯だと目されている。それよりも重要なのはピエール王の愛人だというまことしやかな噂が流れているのだ。

それにしても夫人の娘の名前が書かれている。これはどうしたことだ。長女、ディアヌ。14歳。

総覧して、父親が携わっていた業務に関して考え直す必要を感じた。どうやら、じたいは急を要しているらしい。ナント王は、本気で伯爵家をつぶすつもりなのか…。

ふいに人の視線を感じて、アンリは青い血を発揮させてしまった。赤い血の平民ごときに心の中を蹂躪された、そのような屈辱的な出来事に怒りで魂を奪われたのだ。

「だれだ！そこで見てるのは！！」

「アンリさま！」

青い血は、ドアを乱暴に開けさせた。そこには、わざとらしく驚く女官長アンヌが長身をのけ反らせていた。